宝物集（巻五）より

昔、釈迦如来、天竺の大国の王とむまれておはしましゝ時、国静かに、民おだやかにてすぐし給ふ程に、隣国に国あり、舅氏国といふ。彼国飢渇して、五穀種をたち、食物名字をきかず。このゆへに死骸道にみちて、ほとんど、国民餓死におよべり。舅氏国の人民相議して云く、「我等徒に死なんよりは、隣国の大国にむかひて、五穀をうばひとりて命をいくべし。戦のならひ、勢による事なし。一日と云とも存命せん事、こひねがふ所也」とて、すでに軍だつを、大国きゝつけて、万が一の勢なるがゆへに、かるめ、あざけりて、手どりにせんとするをきゝて、大王、大臣・公卿にのたまはく、「合戦の時、おほくの人死なむとす。ねがはくは戦をとむべし」と制したまひければ、「宣旨と申ながら、この事こそ、力および侍らね。我、合戦をこのむ事なし。隣国すゝみおそふ。たゝかはずは存命すべからず」と申侍りければ、大王ひそかに后をよびはなちて、「我、国王としてかせんをこのまば、おほくの人死なんとす。我、深山にこもりて仏法を修行すべし。汝いかゞおもひ給ふ」とかたらひ給ひければ、后、「大王をはなちたてまつらずして多年におよべり。今更にいかゞはなれ奉らん」とのたまひければ、「君は女人也。隣国来るといふとも、よもころし奉らじ。よく〳〵はからひ給へ」とこしらへたまひけれども、つゐに大王にぐして深山へ籠り給ひぬ。

大国の軍、国王のうせ給へりしことに驚きて、たゝかふ事なくして小国にしたがひぬ。大王深山にして、峰の木の実をひろひ、沢の若菜をつみて、おこなひたまひけるほどに、一人の梵士出来り、「大王のかくておこなひ給ふ事、希代の事也。我、御伽つかまつるべし」とてつかへ奉る。大王、有難、うれしくおぼしめしてすごし給ふほどに、大王峰の木の実をひろひにおはしたるまに、この梵士、后をぬすみてうせぬ。大王かへり、み給ふに、后のおはせざりければ、山ふかくたづね入給ふ。道に大なる鳥あり、二の羽おれてすでに死門にいり[ぬ]。大鳥、大王に申さく、「日来つきたてまつりたりつる梵士、后をぬすみ奉りてにげ侍りつるを、大王かへりたまふまでとおもひて、ふせぎ侍りつれども、梵士、竜王の形を現じて、二の羽をけをりたり」といひて、つゐに死門に入ぬ。

大王あはれとおぼして、高き峰にほりうづみて、竜王にてありけると云事をしりて、南方にむかっておはしましける程に、深山の中に、無量百千万の猿あつまりて、のゝしりける所へおはしぬ。猿猴、大王をみつけて、よろこびたのしとていはく、「我等年来領する山を、隣国よりうちとらんとするなり。明日午の時に、戦定るべし。大王を以[て]大将とすべし」といふ。大王おもひかけぬ所へ来りて、くやしく思ひながら、「うけ給ぬ」とてゐたまひたりければ、弓矢を以てきて、大王に奉れり。いふがごとく、つぎの日の午の時ばかりに、池にうき草なびきて、数万の兵をそひきたる。大王、猿猴[の]すゝめによりて、弓をひきてかたきにむかひ給ふに、弓勢人にすぐれて、臂、背中にまはる。かたき、大王の弓勢をみて、箭をはなたざるさきに、にげぬ。猿猴等大によろこびて、「このよろこびには、いかなる事をかせんずる」といひければ、大王、猿猴等につげてのたまはく、「我、年頃の后を竜王にぬすみとられたるゆへに、竜宮城にむかひて南方へゆくなり」とのたまひければ、猿猴等申さく、「われらが存命、ひとへに大王のちから也。いかでかその恩をおもひしらざらん。すみやかにをくり奉るべし」とて、数万の猿猴、大王にしたがひてゆく。

南海のほとりにあらざりければ、いたづらに日月ををくるほどに、梵天帝釈、大王の、殺生をおそれて国をすて、猿猴の、恩をしりて南海にむかふ事をあはれとおぼして、小猿に変じて、数万の猿の中にまじはりていふやう、「かくていつとなく竜宮をまもるといふとも、かなふべきにあらず、猿一して板一枚、草一把をまうけて、橋にわたし、筏にくみて、竜宮へわたらん」といひければ、小猿の僉議にまかせて、をの〳〵板一枚、草一把をかまへて、橋にわたし筏にくみて、自然に竜宮城へいたりぬ。竜王いかりをなして、大きなる声をおこして、くれをやりて光をはなつほどに、猿猴霧にゐひ、雪におそれてたをれふしぬ。小猿、雪山にのぼりて、大薬王樹と云木のえだを折て、かへり来りて、ゐひふしたる猿どもをなづるに、たちまちにゐひさめ、心たけくなりて竜をせむ。竜王、光をはなちてひらめきけるを、大王を以て射さす。竜王、大王の矢にあたりて、猿猴の中におちぬ。小竜等この事を見て、たゝかはずしてにげさりぬ。猿猴等、竜宮にせめ入て后をとりかへし、七宝をうばひとりて、本の深山にかへり、さて、彼舅氏国の王うせにければ、大国小国臣下等、此大王をしのびて、むかへとりて二ヶ国の王として有。猿丸の、竜宮城をせめてうちとらん事、おぼ[ろ]けにはかなひがたき願にぞ侍るめる。こまかには六波羅蜜経にぞ申ためる。